

朴孟洙著『開闢の夢』

「東アジアを覚ます—東学農民革命

と帝国日本」より (23)

信長正義

これまで

東学農民革命に関する研究の第一人者一人である朴孟洙氏の著書『開闢の夢』の中から大事な項目と思われるものをピックアップし、それを翻訳しながら要約したものを紹介している。

前号で紹介したのは、日本軍が 1894 年 7 月 23 日に日清戦争の口実をつくるために起こした「朝鮮王宮占領事件」は、武力で王宮を占領した侵略行為であつたし、当時の国際法を無視した不法行為であつた。そこで日本政府および日本軍は初めから真相の隠ぺいとねつ造にあくせくした。真相を発明した著述物はすべて刊行禁止処分にされ、日本人には日清戦争開戦の真実と、朝鮮の地で行われた日清戦争において日本軍に抵抗する民衆、特に東学農民軍に対する虐殺については知らされていない。すなわち、当時の日本政府によってねつ造された日清戦争の日本軍最初の武力行為が朝鮮王宮であり、親日傀儡政権を樹立したこと、東学農民軍を「ことごとく殺戮した」ことを知る日本人はほとんどいないことなどであった。今号はそのつづきである。

19世紀末の東アジア戦争に対する日本人の歪曲した記憶—東学農民革命と日清戦争を中心にして

5) 朝鮮民衆の朝鮮王宮占領事件に対する認識

それでは朝鮮の民衆に朝鮮王宮占領事件はどのように認識されてきたのか？ 1894 年 7 月 23 日国際法に違反し朝鮮の王宮に不法な武力行使を行った日本は、高宗を捕虜にし、大臣を脅迫して朝鮮政府軍の武装解除を行ったあと、大院君を強制的に推戴し親日傀儡政権を樹立した。この過程で朝鮮政府軍は明け方から午後遅くまでソウル全城で日本軍に抵抗、熾烈な戦闘を繰り広げた。しかし近代的な戦術訓練と近代式武器で武装した日本軍の強大な戦力にかなわなかつた朝鮮政府軍は、当日午後遅くに降伏することで、朝鮮政府は日本軍によって完全に掌握されるようになった。そのため、国家の一大事変だった朝鮮王宮占領事件は当時の朝鮮民衆にはどのように記憶されたかが気遣われた。

王宮占領事件についての民衆の記憶を代表する事例として、第二次東学農民革命を導いた全琫準の最後の陳述である。

日本は開化と称して初めから一言も民間に伝えることなく、また一つの告知文もなく軍隊を率いてソウルに入り、夜半にむやみに王宮に入って行き国王を驚かせた。そのために世間一般の庶民は忠君愛國の精神から憤怒を抑えることができなく、義軍を集めて日本人と戦おうとしたのである。

この陳述に現れる朝鮮王宮占領事件に対する全琫準の認識は明確である。日本政府及び日本軍部が王宮占領の真相をどのようにねつ造しようとも、全琫準を代表とする農民軍は王宮占領事態を朝鮮の国権が侵略者日本に蹂躪された事件だと認識し、侵略者日本を征伐して懲らしめようとする忠君愛國の精神で再蜂起をするようになったということが確認できる。

日本軍の朝鮮王宮占領を侵略と規定して再蜂起を準備しようとする農民軍の動きは北接、すなわち崔時亨を中心とした教団指導部の影響下にあった忠清道地域でも確認できる。全琫準の 10 月（陰暦）蜂起より早い時期である陰暦の 7 月初に忠清道報恩で農民軍が‘倡義’（=国の乱れに当たって義兵をおこすこと）を起こそうとしたのも、王宮占領を国家の危機だと考えた東学農民軍の認識の一端を見せてている。その具体的な内容を確認してみることにする。

この月初めの 2 日（1894 年 7 月 2 日＝陽暦 8 月 2 日）東学徒数百名が思角面高升里の川岸に集まつたという噂を聞いた。その噂が事実であるかを確認して〔蜂起することを〕諭すために郡守自らそこに行ってみると、うわさ通り東学徒がすでに集まっていた。…この度の騒ぎ（日本軍の王宮占領事件）に当たっては当然倡義しなければならない…。〔『東学農民戦争史料叢書』〕

この内容は朝鮮王宮占領事件にかかわる農民軍の動きの中で最初の事例であり、農民軍最高指導者全琫準の動きよりもひと月以上先立つ事例として確認されている。特に注目されるのはこのような動きがいわゆる北接管内で現れたということである。このことは朝鮮王宮占領事件に対して東学の南・北接はその所属に関係なく共通した認識と対応を見せていることを証明している。

朝鮮の独立のためであると言ひながら、王宮を攻撃した 7 月 23 日の日本軍の行為に対して、在野の儒生である徐相轍もやはり日本が引き起こした明白な侵略行為であるとみなした文章がある〔『駐韓日本公使館記録』に「湖西忠義徐相轍布告文」という題名で収録されている〕。このように農民軍と義兵を中心とした朝鮮民衆の朝鮮王宮占領事件に対する記憶の構造の一端が

見える。全琫準に代表される農民軍と甲午義兵の義兵長徐相轍は王宮占領事態を民族的危機状態と認識した。すなわちこの事件を契機にして民族的危機克服のために全面的な抗日闘争に出ることになったのである。

日本の民衆は日本政府および軍部によってねつ造された事実を歴史的真実として記憶してしまった。このような歪曲した記憶構造として埋没していくとき、朝鮮の民衆はその反対に外勢の前に無力であった政府に代わって、民族的危機克服のために抗日闘争の先鋒に立つことになったのである。

1894年7月23日の朝鮮王宮占領を日本による侵略として規定して、侵略者日本を駆逐するために蜂起を起こした農民軍と儒生たちの認識は、その後梅泉黃玹が書いた『梅泉野録』を通じて事件に対する記憶が生き生きとよみがえる。その内容を要約すると

大鳥圭介（朝鮮駐在の日本公使）が宮中を犯したので、宮中を守っていた兵士は銃を連発した。しかし王宮の門を通って高宗君主が寝ている場所に行つた大鳥は、君主を脅して「むやみに動く者は首を切る」という意向を宣告するように言った。そこで兵士たちは銃を壊し軍服を引き裂いて逃亡した。嘗のすべての兵士もまたある所に集まり「いま國の異変がこの地に及んで宮中のことを知るすべもなくなつた。〔日本軍〕はすべての嘗が解散しないことを知れば好き勝手なことはしないだろう。しかし万一もしものことが起こればみんな決然と死ぬことにしよう。そこで大砲を屏の横に設置して防御した。万一日本軍隊が宮中に入って嘗を奪い取るなら嘗の大砲を一齊に発射する」と言っていた。

大鳥は君主の裁可を受け兵士たちに兵器を捨てるよう言った。国家が数百年間蓄えてきたものがあるしかしその朝なくなってしまった。そしてソウルにはただ一人の兵士も残るもののがいなくなった。

黃玹は当時全羅道求礼に住みながら高宗元年（1864）から隆熙4年（1910）までの47年間の歴史を自分が見聞きしたままを記録し、この『梅泉野録』を残した。それゆえ、ここに登場する日本軍の王宮占領とこれに伴う朝鮮兵士たちの抵抗内容は直接目撃したものではなく、伝え聞いた内容を記録した可能性が高い。このような点で朝鮮兵士の抵抗の姿は歴史的事実と違う可能性もある。しかし黃玹の記録は日本軍の朝鮮王宮占領に対して朝鮮兵士をはじめとして当時の朝鮮知識人および民衆の憤怒が上と同じ形態で朝鮮各地に広がつていったということをうかがい知ることができる。さらに『梅泉野録』に記述されている内容は、1894年以後の朝鮮民衆の東学農民革命および日清戦争に関する記憶形成の根幹となった可能性も推し量ることができる。

要約すれば、日本軍による不法な朝鮮王宮占領は、朝鮮の場合当初から全琫準をはじめとする農民軍、在野儒生、知識人および一般民衆もすべてが、明らかな侵略行為であると認識し、侵略者日本軍隊を追い出さなければならないというところに共感してきた。このような認識は1894年7月23日以後に展開される朝鮮民衆の抗日闘争の源泉であるといつても差し支えない。

6) 結び；過去の歴史に対する日韓民衆の共通する認識の地平を開くことができるか。

2003年4月13日に実施された日本の統一地方選挙結果について中塚明教授は「右傾化の風が一層強くなった結果」だと言い、「このような右傾化の風は日本をして北朝鮮の核問題を口実に中国を包囲・圧迫する戦略を駆使しようとする米国と陰謀してもう一度東アジアで戦争を起こそうとするものだ」と憂慮し、このような時こそ「日・韓交流を通して民族的連帯」が重要だと強調する。

日本の右傾化現象は過去に対する歪曲した記憶の強化と密接な関連がある。その中でも特に東学農民革命と日清戦争が終結して以来、日本政府・軍部・世論等によって組織的にして持続的に歪曲・ねつ造されてきた歴史は、今日の日本人をして過去の歴史に対する歪曲された記憶を歴史的事実と信じてしまう「病気」にかかった意識構造を持たせてしまった。このように患った日本人の意識構造克服のために日本の知識人と歴史家の奮闘と努力が続けられてきたが、日本の歴史の歪曲は今も政府当局と国会・言論・右翼系知識人によって繰り返されていて、それによって一般的日本人の過去の歴史に対する歪曲された記憶も絶えず再生産されている。

これに対して韓国の場合、東学農民革命と日清戦争以来、日本に歪曲されてきた歴史的事実を事実のままに記録して明らかにしようとする努力を持続的に展開してきたといえる。その代表的事例がまさに第二次東学農民革命と日清戦争の直接の契機となった朝鮮王宮占領事件であった。

今日、日・韓両国の民衆は同一の歴史的事実について明らかに互いに違った記憶の構造のなかで生きていると言っても過言ではない。韓国の場合歴史的事実の究明を通して過去の歴史に対する既存の不完全で誤った記憶を克服しようとする動きが大勢であるのに反して、日本の場合は日清戦争以来固執した歴史の歪曲と、ねつ造を清算することはおろか、拡大再生産しようとする動きが大勢を形成している。このように歴史に対する互いに異なる記憶が共通の記憶として成り立っていない両国の民衆の連帯は決してたやすいことではない。